

加藤九祚88歳の業績を顕彰する画期的「米寿ツアー」 ：中央アジアと日本・心のシルクロードを訪ねるキャラバンの内容

68歳から20年間、中央アジア・ウズベキスタンに毎年通い続けて仏教遺跡を発掘調査、特にアムダリア川北岸の軍事基地内にあるカラテパ遺跡では12年にわたる継続発掘で、玄奘三蔵（602 - 664）も訪れた可能性が高い大規模な僧院伽藍の全容を掘りあげる成果を上げた。加藤九祚 88歳は、毎年一冊「一人雑誌 アイハヌム」を刊行し、日本やアジアの精神文化に大きな影響を与えた大乘仏教北伝のなぞを秘めるアムダリア北岸を中心とした中央アジアの歴史文化的研究に多大な貢献を続けている。アムダリアは、観音菩薩や弁財天など日本人が仏教を身近に感じる二つの川の女神の起源とされるゾロアスター教のアナーヒター（愛称ナナ）が表象されている。

そこで、加藤九祚先生自身が実行委員会を組織し、現在も発掘調査が続くカラテパ遺跡で、カラテパ遺跡の全容を解説し、その意義を語るとともに、加藤先生のオリジナル曲「カラテパ発掘の歌」をご披露、親しく懇親の宴を開催。大乘仏教とともに日本にも伝播した音楽文化をしのび、「アイルタム幻想 アムダリアを渡った響き」と題する遺跡コンサートを行い、またウズベキスタンの首都タシケントで、日本の外務省、薬師寺後援、ウズベキスタンの政府系機関「文化芸術フォーラム基金」との共催で「シンポジウム&フェスティバル」を開催し、加藤先生の米寿の挑戦を顕彰する。アイルタムは、日本の三味線やひいては江戸歌舞伎の起源ともいえる琵琶を弾く楽人像が出土したことで知られる。

今回の「加藤九祚米寿ツアー」の見所；「シンポジウム&フェスティバル」及び遺跡コンサートの概要は下記の通り。

シンポジウムのタイトル「玄奘三蔵と北部バクトリアの仏教遺跡」

加藤九祚・国立民族学博物館名誉教授 記念講演「北バクトリアの今日的意義」

ピダエフ・前ウズベキスタン考古学研究所所長 記念講演「未公開出土品から見えるカラテパ僧院伽藍」
下記 1参照

ルトヴィラーゼ・ウズベキスタン科学アカデミー会員・上院議員 下記 2参照
特別講演 「北バクトリアからバーマンへ - 玄奘三蔵の旅のルートめぐって」

カラテパ発掘未公開出土品の一挙特別公開

遺跡コンサート及び首都タシケント青年宮殿におけるアジア・シルクロード音楽フェスティバル

アイルタム出土「琵琶を弾く楽人」の時空を越えた最後の姿が津軽三味線であるということから、津軽三味線の登竜門ADD三味線コンテスト（弘前）グランプリの木村俊介（篠笛演奏家、作詞・作曲家）を中心とし、古代から今日までアジアのメロディラインを担っているアジアの笛のチャンピオン二人；1）お釈迦様が誕生したネパールの天才バンスリ（竹笛）奏者パンチャラマ2）都山流尺八全国コンクール金賞・文部大臣賞受賞の橋本岳人山及びアイルタム出土の三体の楽人像の一つとしても出土しているリズム楽器太鼓の演奏者として数百通りのリズムを駆使するタブラのサラバンラマによる遺跡コンサート「アイルタム幻想 アムダリアを渡った響き」を開催。行く先々でミニコンサートを開催する。共催団体であるウズベキスタン文化芸術フォーラム基金もウズベク最高のミュージシャンや舞踊団を用意し、首都タシケントの文化芸術フォーラム基金青年宮殿で「アジア・シルクロード音楽フェスティバル」を開催する。

1 「アイハヌム7号」「テルメズの歴史（アラブ以前）- 都市の起源と発展」（Sピダエフ）「6世紀後半から7世紀初めにかけて・・・玄奘三蔵によれば、テルメズは 当時周囲二十余里（約10キロ）、東西に長く南北は狭く、伽藍は十余ヶ所、僧徒は千余人で、ストゥーバが多かった。玄奘の言う仏寺の多くは、おそらく、今のハキム・アッ・テルメジのある地域にあったと考えられる。このいっぴいに砂岩層を掘り下げた地下式僧房の痕跡が多数発見されている。・・・古テルメズの区域からペーローズ（459 - 484）のドラクマ銀貨を模したコインがかなりの数発見されている。・・・このコインの発見は5世紀末 - 7世紀である。このコインに見られる錘の図文は、テルメズが初期中世に政治情勢にかかわりなく、アムダリアの主要な河港であったことを示している。・・・」

2 加藤九祚先生は今、ウズベキスタン最高の研究者の一人として敬意を表するE・ルトヴィラーゼ氏の「中央アジアの文明・国家・文化」（2008年刊ロシア語300頁、英語302ページ）を日本語に翻訳中で「シルクロード学序説」の副題をつけて近く刊行される予定である。この日本語版には日本人の知らない「玄奘三蔵の旅」と題する一章も追加される。内容は、玄奘の「大唐西域記」の旅を、中央アジアを中心とする古代遺跡の調査研究の結果に沿って、ルート解明を試みた、中央アジア70年の「玄奘学の成果」（古曳正夫・オクスサ学会設立発起人）。